

市史通信

【目次】

- 横浜・関東大震災の記憶
—日高帝さんの震災体験—
- 空襲と横浜市の公文書
- 米軍将兵と家族の暮らし
- 所蔵資料紹介
- 市史資料室たより



関東大震災直後の県庁前交差点(1923(大正12)年9月中旬頃)

「(関東大震災関係写真帖)」所収 前川淨二家資料(横浜市史資料室所蔵)

第7号

【発行日】2010年3月31日
 【編集・発行】横浜市史資料室
 〒220-0032
 横浜市西区老松町1番地
 横浜市中央図書館・地下1階
 【電話】045-251-3260
 【FAX】045-251-7321
 【E-mail】
 so-sisi@city.yokohama.jp
 (4月1日より)
 【ホームページ】
 http://www.city.yokohama.jp/me/somu/housei/sisi/
 (4月1日より)

横浜・関東大震災の記憶 —日高帝さんの震災体験—

一、災害記憶の継承

二〇一〇年二月一日から三月二八日までの二ヶ月間、横浜市中央図書館地下階ホールで行われた展示会「横浜・関東大震災の記憶」及び二月一三日のシンポジウムには、多くの市民が来場され、アンケートを通じて様々な反応が寄せられた。その中で最も多かったのは、自らの肉親がかつて体験した関東大震災を視覚的に知ることができたという感想と、震災の記録をさらに収集・保存し、教訓として後世に伝えてほしいという希望であった。

奇しくも本展示会直前の一月一三日(現地時間二二日)には、中米ハイチでM七・〇の地震が発生し、二〇万人を超える方が犠牲となつた他、二月二七日には南米チリでもM八・八の地震が発生し、その震動で生じた津波は日本へも押し寄せた。近年、二〇〇四年一二月のスマトラ沖地震(M八・七)や二〇〇八年五月の中国四川省大地震(M八・〇)など世界各地で大規模な地震が発生しており、また、国内においても一九九五年一月の阪神・淡路大震災(M七・三)以降、二〇〇四年一〇月の新潟県中越地震(M六・八)や二〇〇七年三月の能登半島地震(M六・九)、二〇〇八年六月の岩手・宮城内陸地震(M七・二)と大きな地震が

続いている。そうした状況から市民の地震に対する関心は高いのだろう。関東大震災は開港以降の横浜が経験した唯一の大規模な地震災害であり、そこから得られる教訓は多い。今後、横浜市史資料室は「昭和の横浜」の起點となる「関東大震災」の資料収集・保存に努めるとともに、横浜市の記憶装置として様々な機会を活用して市民に情報を発信していきたいと考えている。本稿はその一環として、当資料室に所蔵されている震災関連資料からある女性の体験記を紹介し、災害記憶の継承について考えてみたい。

二、「天使降臨」

次に掲げる文章は『横浜貿易新報』臨時第一八号(一九二三年一〇月一日)に掲載された新聞記事である。

関内方面では公園が唯一の避難場所であったためドロ水につかつたまゝ、何万の人間があるは傷き或いは病みつゝ、生残の身に救ひの手を待つてゐたが、五日頃に至るも却々救護班も来なかつたが、たつた一人その中に一人のかよわい女性が六十八名の傷病者を甲斐なくしく薬を与へ繃帯を巻きなどして懇切な応急手当をなし万人に天使の感あらしめた。健気な働きぶりが加賀町警察署の知る所となり近く表彰される事になつてゐるが、右は中郡成瀬村下柏谷当山町一五七スビルマン商会事務員鈴木泰(二二)と云ひ以前看護婦をし



日高帝さん(2010年2月20日、自宅にて、吉田撮影)

が搬出した一瓶の外科用薬と少許の綿帯及び脱脂綿とを以て、加賀町署巡查の指揮の下に、六十八名の傷者に対し応急手当を施した」と記録している。「鈴木ティ」の救療活動は罹災した人々の心に響いたようだ。

その新聞記事の主人公である「鈴木ティ」=日高（旧姓・鈴木）帝（てい）さんから横浜市は二〇〇四年九月に震災関連資料の寄贈を受けていた。現在、帝さん寄贈の資料群は総務局防災担当を経て横浜市史資料室に保管されている。今回、二月一三日のシンポジウムを契機に、帝さんと親しい鹿島建設小堀研究室プリンシパルリサー・チャード・武村雅之氏の協力が得られ、横浜開港

の活躍を紹介している。物資不足のなか、臨時号という限られた紙幅で新聞記事として取り上げられている点から「鈴木ティ」の行動が際立っていたことが窺える。一九二七（昭和二）年に横浜市役所市史編纂係が刊行した『横浜市震災誌』第五冊も「善行美蹟」に「鈴木は右商会（スピルマン商会——引用者注）に被雇中の者なるが、震災と同時に公園に避難した所、四日に至るも未だ救護班の出動に遇はず、傷病者の呻吟してゐる者が多いのに同情し、自己

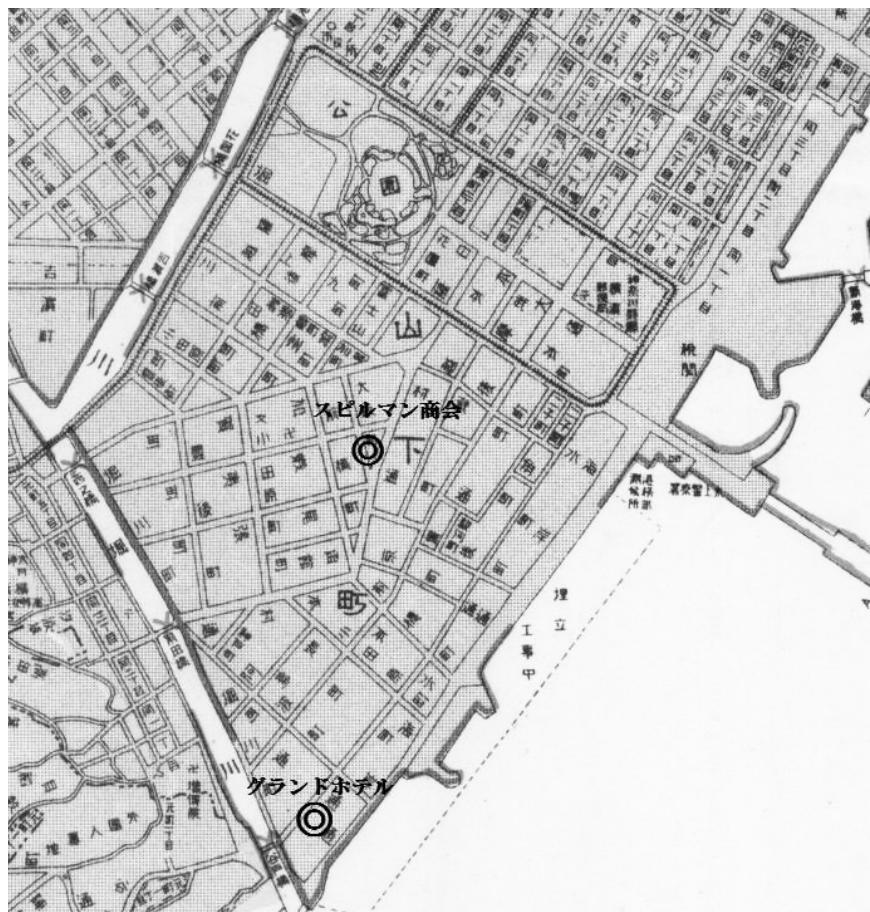


外國商館の建ち並ぶ山下町(関東大震災以前、絵葉書)
平原健二家資料(横浜市史資料室所蔵)

資料館の中武香奈美主任調査研究員とともに、帝さんご本人のヒアリング調査を行うことができた。その成果を踏まえながら帝さんの震災体験を追つてみたい。

三、一〇六歳の日高帝さん

二〇一〇年二月二〇日、武村氏、中武氏、筆者の三名で都内の帝さんのお宅を訪問した。私たちが玄関に着くと、家の中から声に張りのある元気なおばあちゃんが出てこられ、私たち



山下町157番地スピルマン商会の位置(「震災被害図より作成」)

横浜市役所編『横浜復興誌』第2編所収(横浜市史資料室所蔵)

を応接間の方へ招いてくれた。そのおばあちゃんこそが日高帝さんであつた。日露戦争開戦直後の一九〇四年(明治三七)年二月二七日にお生まれなのが迎えられることになる。しかし、とても一〇〇歳を越えているとは思えないほどお元気で、お肌も若々しかつた。私たちのお茶などを頂きながら約三時間、外國人商館や横浜での生活、関東大震災の体験などについて帝さんからお話を伺つた。神奈川県中郡成瀬村か

年九月一日もスピルマン商会内で罹災し、着の身着のまま、和服に下駄履きの姿で横浜公園に避難したという。

その時の回顧録が横浜市史資料室に所蔵されている。同様の回顧録については、すでに武村氏が「現代に生きる関東大震災の記憶——一〇二歳のおばあちゃんの体験から」『地理』五一号

かねてより御尊顔を拝し、関東大震災の当日の有様を、個人として、申しあげたく存じておりましたが、その折もなく、一〇〇歳になってしまいました。勿論、（横浜）市には沢山の記録はございますが、東京のことは大きく新聞やテレビで報ぜられておりますが、横浜全土が焼土と化した惨事は、あまり知らされてないよう思いますので、ほんの一部でもお役に立つ箇所があれば幸と存じ、書いてみました。私は二十歳の時、ソ連の会社におりました。周囲は各国の貿易商も多く並んでいました。突然ゴー、というすさ

四、日高帝著「關東大震災」

の手紙となつてゐるので、それらの点に留意してお読み頂きたい。

（二〇〇六年九月）及び著書『未曾有の大災害と地震学——関東大震災』（古今書院、二〇〇九年）で内容を紹介し、詳細な分析を加えているが、一人でも多くの市民の方に帝さんの体験を知つてもらうため、武村氏と相談し、帝さんの許可を得て、ここに全文を掲載することにした。なお、掲載にあたつては、原文を尊重しつつも、読みやすいように適宜修正を加え、カッコに注を付した。また、回顧録は横浜市長宛て

逃げるとさけぶ声、真赤な炎が轟音と共におそいかかってくる。着のみ着のまゝの下駄ばきで、どこが道なのか瓦礫の上を乗り越え乍ら山下町公園（横浜公園）に着く。

公園は人、人、人、家屋の下敷きからやつと逃れて息をひきとる人、沢山の怪我人の老若男女、すでに公園の四方は火の海、大小の地震は絶えず続く、水道の鉄管は破裂して一滴の水もなく火の子を払い乍ら一夜を明かす。親が

どく限りの枝をひし折つてかぶせる。



山下町の惨状(1923(大正12)年9月中旬頃)
前川清二家資料(横浜市中央資料室所蔵)



山下町から本町通りを望む(1923(大正12)年9月中旬頃)
前川満二家資料(横浜市史資料室所蔵)



倒潰した横浜税関の倉庫(1923(大正12)年9月中旬頃) 前川津二家資料(横浜市史資料室所蔵)

くた、のどもカラカラ、そのとき一人の青年が一杯の水を下さいました。感激で泣きました。一円六十五銭持つておりましたのでお礼にこれだけでも取つて下さいと出しましたが、いいですよとの言葉は今日まで忘れることなく大切な憶い出としております。

応急処置がはじまった。この時ほど外人が神様仏様に見えたことはない。私も手伝った。ところがこの三人は次の場所に行く途中と云つて、パイナップル缶詰三個と医薬品を私に渡され元町方面にゆかれました。自分の体もくた

始めた人がいた。九月二日十時頃加賀署警察だつた。応急の用意もない、何もしてくれない、デマはとぶ。間もなく三人の外人が見えた。すぐ怪我人の

く大切な憶い出としております。

借りしました。手分けして缶詰は一滴残らず口に入れて歩く、消毒剤も医料も使い果たしてしまった。人のうわさに税関には何か焼け残つていると聞き、一縷の望を以つてゆけば途中は焼け野原、どこの橋も落ちて死人は何人となく散乱している。税関には何ひとつなくて黒い布が少しあつたのでそれを頭にかぶつた。何かあるかと海岸まで歩けばグランドホテルもオリエンタルホテルも丸焼け、そこには外人の多くが黒こげでうつぶせになつて重なりあい、猛火に絶えかねて海にとびこみ板やゴミと一緒に浮いている人、幼い子供と母親、何れの国か判らない数人の溺死体、時はすぎても救護も何もありません。

時の流れとは申せ現代は何と幸せでしょう。公園の皆様に、何か食べさせ点々と見える灯を便りに歩く、少々顔にあたるのは雨らしい、道を間違えてはまた戻る、星ひとつ見えない。やつと字田中についた。中央には大きな寺がある。山門から道まで大木が茂つていてその反対側は竹やぶでやみの二重で何もみえない。手に下駄をはかせ手さぐりで這いすり乍やつと橋のたもとに出た。もう我が家は近い。暗くとも小川のせせらぎは聞こえる。はだしで夢中で歩く。家についたのは何時だつたか、古い蔵の壁は落ちていたが家族は無事でした。



焼けたグランドホテル(1923(大正12)年9月中旬頃)
前川淨二家資料(横浜市史資料室所蔵)

たいとさがしても何ひとつないので、私の仕事も終わつたので署長様に御挨拶申しあげ、我が家伊勢原方面に向つて歩きはじめました。

保土ヶ谷、戸塚で暗くなり、近くに神社でもないかとねぐらをさがしていふとき、農家の奥様から声をかけられ、お泊り下さいとのお言葉に只涙、涙でした。お風呂と夕食に預り、その上ゆかたまで頂戴して、ワカメのような自分の着物をぬぐことが出来ました。朝の出発に御一家様に御礼の言葉も声にならず、只深々と頭をさげるだけの挨拶でした。朝七時半より戸塚、藤沢、茅ヶ崎、平塚と只歩く、途中地震の強いところは地が割れている所も大小あつて夜道はこわい。

郷里も今は伊勢原市下粕谷、当時は成瀬村、下粕谷字久保という寒村、平塚から十二キロ余あるという。遠く点々と見える灯を便りに歩く、少々顔にあたるのは雨らしい、道を間違えてはまた戻る、星ひとつ見えない。やつと字田中についた。中央には大きな寺がある。山門から道まで大木が茂つていてその反対側は竹やぶでやみの二重で何もみえない。手に下駄をはかせ手さぐりで這いすり乍やつと橋のたもとに出た。もう我が家は近い。暗くとも小川のせせらぎは聞こえる。はだしで夢中で歩く。家についたのは何時だつたか、古い蔵の壁は落ちていたが家族は無事でした。

以上

五、日高帝さんの記憶

帝さんの回顧録は震災直後の惨状を伝えるとともに、困窮した状況下での人間の温かみが垣間見え、読む者の胸を打つ。帝さんの救療活動はもちろん、救援に駆け付けた外国人や水を分けてくれた青年、宿を提供した農家など災害時の助け合いの記憶は教訓として後世に残していくべきである。

他方、帝さんの記憶と新聞報道、『横浜市震災誌』の間にはいくつかの齟齬が見受けられる。例えば、既述の『横浜市震災誌』には、加賀町署巡查の指揮下で帝さんが活動したことになつて



日高帝さんへのヒアリング調査
(2010年2月20日、自宅にて、吉田撮影)

いるが、帝さんの記憶に依れば、警察の動き出したのは帝さんが救療活動を始めた以降であり、それまでは手を拘束していたという。署舎を失い、署員やその家族にも犠牲者が出ていたのだろう。そうしたなか、『横浜市震災誌』の記録は警察自身の手によって収集されているので、どうしても警察の視点立場で書かれててしまう。官序の編集した公的記録は、罹災時の状況や人々の活動など災害の全体像を掴むのに適しているが、そこには記されない埋もれた記憶も多く存在する。罹災者の体験記や新聞記事、公的記録などを複合しながら関東大震災の記憶を後世に継承していく必要がある。

今回、帝さんの回顧録から公的記録には残らない人々の動きを浮き彫りにすることができた。帝さんは震災時の体験が忘れられず、私費を投じ、毎年九月一日に日高家の菩提寺・千葉県鋸南町妙法寺で横浜市の犠牲者の慰靈祭を執り行つている。今日、一〇〇歳を越えられて帝さんがお元気なのは、震災時の善行が功を奏しているのかもしれない。調査を通じて改めて人と人との繋がりの大切さを感じさせられた。

【謝辞】お忙しいなか、長い時間お話をありがとうございました。

(吉田律人)